



希望の象徴として再生・保存された「奇跡の一本松」。その奥で、大量の土を山から平地部に迅速に運ぶためのベルトコンベヤーの建設工事が急ピッチで進む



## 復興の最前線

第2回 [ 岩手県陸前高田市 ]

# 市民の命を守る高台移転、かさ上げ工事 ダンブ200万台分の土を運ぶ計画

岩手県陸前高田市は、東日本大震災で市街地が丸ごと津波にさらわれ、約1800人に及ぶ死者・行方不明者が出た。市職員の多くも犠牲になり、ゼロどころかマイナスからの復興を迫られた。UR都市機構は2011年4月から職員を派遣、以来ずっと同市の復興まちづくりを支援している。現地ではいま、膨大な量の土の移動を伴う大掛かりな工事が、安全を最優先に進められている。

写真：井上健 取材：文：茂木俊輔



「試験盛土」工場の現場で。右から、陸前高田市都市計画課長・山田壮史氏、UR都市機構陸前高田復興支援事務所・中島啓、同・綿谷光城

ち込む。「最初の1年は私も市内の仮設住宅で暮らしました。周りの皆さんも、いつ家を再建し、そこに移れるのか、大変気に掛けていました。それを考えると、10年掛かる事業でも2、3年でやり遂げる覚悟で臨まねば、と気が張ります」

### 「試験盛土」で不安を解消

工事担当は、今年4月に着任した綿谷光城だ。盛土の安全は最優先事項。そのため工夫が冒頭で紹介した、高台部の搬出土を活用した試験盛土だ。市内4カ所で実施。かさ上げ盛土の安定性を検証し、将来のまちの安全を担保する。

しかし、平地部から高台に土地の権利を移すために協議・調整を必要とする地権者は2000人規模に及ぶ。一方、対応できる職員は市とUR都市機構合わせても約40人にすぎない。協議・調整は迅速に進めなければならないが、「ひとさまの財産ですから、大切に扱う必要があります」。数十人規模の地権者がいるような一般の事業でも、多大な労力と時間を要するが、ここはけた違いのボリュームだ。協議・調整は住民だけでなく、国や県、鉄道会社などの関係機関に及ぶ。すべての要望を盛り込むのは至難の業だ。「見直しに見直しを重ねて、ようやく最適解が見えてきた段階です」

工事規模も並ではない。高台を整備するのに山を最大80mも削り、かさ上げ部はまち1つ分を約10mほど盛土する。まち中を行き



住民との個別相談会に臨むUR都市機構陸前高田復興支援事務所の中島啓

交う土の量は約1000万m<sup>3</sup>、ダンブカーに換算すると約200万台分以上に及ぶ。

大量の土をスピーディーに運ぶ工夫がベルトコンベヤーの活用。大量の土を高台からかさ上げ部に迅速に運び出すために、幅1・8m、総延長約3kmに及ぶ大型のベルトコンベヤーを設置する。ダンブカーを減らし、交通事故の危険を大きく減少させることにも寄与する。ベルトコンベヤーが国道上をまたぐ箇所では、土がこぼれ落ち

ないように落下防止カバーで覆う。「本格稼働後は1日に約2万m<sup>3</sup>を運び出せるので、ダンブカーに比べて圧倒的にスピード化が図れ、安全面でも優れています」と綿谷はそのメリットの多さを語る。すでに基礎工事が進んでおり、来年3月には稼働できる見込みだ。ベルトコンベヤーの基礎が、そして盛土の山が、新たなまちの希望を乗せる土台として市内の各所で徐々に姿を現し始めた。復興まちづくりに向けた取り組みはようやく目に見える形になってきた。

岩手県から陸前高田市に、震災直後から支援のため出向してきている都市計画課長の山田壮史氏は、「昨年までは計画段階で事業の進捗が見えにくかったのですが、工事が始まり、復興への実感がわき始めています。URにはこれから復興事業のエンジンとしての

ガーッと10t積みのだんぷカーが斜面を駆け上がる。大量の土を頂に落とすと、ブルドーザーがそれを丹念にならしていく。かさ上げ工事に向け、試験的に築く高さ約10mの盛土現場からは、海岸線に唯一残る復興のシンボル、奇跡の一本松が見える。

白砂青松の美しい海岸線が日本百景にも選ばれ、多くの観光客を集めた陸前高田市は、今回の大地震による津波で壊滅的な被害を受けた。市は復興に向けて、山を削って整備した高台に住宅を再建するとともに、旧市街地をかさ上げし、そこに新しいまちをつくり上げる計画だ。UR都市機構が市との協定に基づき、これら土地区画整理事業のすべてに取り組み。

5倍の速さで事業を進める

UR都市機構陸前高田復興支援事務所の中島啓は2012年4月に着任した。「現在、市内6カ所で高台の整備を進めると並行し、残る高台の整備と平地部のかさ上げに向けて手続きを進めています」と語る。来年2月にはすべての工事に着手できる段階に持

陸前高田市におけるUR都市機構の復興まちづくり支援

復興市街地整備	地区名	面積
	今泉	124ha
	高田	192ha
※面積は事業計画等の面積を表す(小数点以下四捨五入)		
災害公営住宅整備	地区名	戸数
	下和野	120戸
	水上	30戸
	大野	40戸
	田端	20戸
※戸数は計画戸数を表す 2013年11月1日時点		

役割を期待しています」と、市民の思いを代弁する。

工事はこれから本格化する。中島はいま、図面を離れ、将来のまちの姿に思いを巡らせている。どういふ人が住み、そこでどんな暮らしがあるのか……。市の伝統行事「けんか七太」の山車と山車が激しくぶつかり合う勇壮な様子や、「うごく七太」の華やかな飾りを付けた山車が新しいまちの中を練り歩く姿も頭に描いてみる。笑顔でそれを眺める市民の姿が、そこにはある。

「まちづくりは『心』を入れていかなないと前に進みません」と、中島は言う。計画に込めた「心」が具体的な形となって姿を現す日は近い。中島は、そう確信している。